

東日本大震災特集2 パート1

# 被災者への共感

## チャーチ&ホームスクーラー、 ボランティアとしての8ヶ月



稲葉寛夫 (チャ・にっぽん代表)

釜石 貨物船が陸に

東日本大震災から8ヶ月。被災した方々のため、神さまは、多くの人々をボランティアに導き、日本のチャーチ&ホームスクーラーたちをも、6回に渡り、派遣して下さいました。それは、被災者の皆さんの痛みに共感し、仕える喜びを学び、きずなを与え、また、その背後にある神さまの不思議な計画を体験していく、貴重な機会ともなりました。今回は、前号の続編として、特にチャ・東北サポートの第2回から第4回派遣を軸に、この8ヶ月をレポートします。

(前号のあらすじ——チャ、仙台、福島へ)

3月11日、地震が起きてすぐに、東京のチャ事務局の電話が鳴りました。「東北のホームスクーラーたち、仙台の明泉の皆さんは、大丈夫でしょうか」。その日は、同様の電話が内外から相次ぎました。

幸いなことに約80家族いる被災地のチャの皆さんたちは、無事でした。多くの皆さんは支援する側にまわり、日頃、チルミを助けて下さる、明泉学園の皆さんらは、被災地と国内外のクリスチャンたちの中継基地として物資100トンの届け先や、ボランティアチームの宿泊場所として、用いられていました。

チャ事務局にも、ボランティアの申し出や義捐金



▲被災した材木工場での物資の支給(8月 仙台・若林区)1回の派遣で釜石から仙台まで3~5ヶ所、果物・野菜・衣料・生活用品・聖書ほか、約5トンのサポートに導かれていった

◀腐った魚と原油と汚泥の臭いにすっかり慣れた!(5月 石巻市)



HSLDA (ホームスクーリング法律擁護協会) 記事「日本のホームスクーラーたちが被災地の支援活動で用いられる」より▼



陸前高田市 がれきの前でいのちと暮らしを思う(5月)

が寄せられました。仙台の皆さんに送ろうとする  
と、現地をまわっていたナタンさんから  
「それはありがたい。被災者の方々、すごい必要  
あり。ぜひ、東京で買ってきてほしい。僕たちには  
気持ちだけで感謝」  
それで物資を調達し、仙台、東松島、石巻、相馬、  
新地、そして、福島第二原発から、ちょうど25キロ  
圏にある南相馬市の病院等に、届けることになり  
ました。

## HSLDA、ロンドンタイムズ ほか、支援チームの輪、拡がる

第一陣の支援を終え、3月26日、ロスに帰国し  
ました。アメリカで支援体制を整えて、さらに増  
強した体制で、第二陣となる支援チームを4月中  
旬ごろ派遣できればと祈っていました。これが、第  
一陣支援と一緒に行った堀井卓チア・サポートスカー  
ル校長と導かれた結論でした。

アメリカで支援を考えて下さっている団体との  
ミーティングや電話でのやり取りが続き、日本から  
も、イギリスの最古の高級紙「ロンドンタイムズ」  
紙から日本のスポーツ新聞まで、チアに電話で状況  
を問い合わせて下さいました。

HSLDA (ホームスクーリング法律擁護協会)  
の皆さんとのミーティングが祝福されて、全米のホー

ムスクーラーたち(約300万人)  
に祈りと義捐金を呼びかけてくれ  
ることになり、8万家族に発信して  
くれました。

## 第2回 チア・東北サポート (4月19~22日) スケジュール決定!

早めに仙台に入って情報収集。  
前日まで南三陸町をまわっていた  
十三男・ブローマン君と話しました。  
「避難所は、物資等あふれていると

ころが多い。でも自宅避難している浜辺の人々等のニーズは高く、チアの案の『個人や集落を直接訪ねてまわる』は、すごくいいと思う」と賛成してくれ、方向性を再確認。

トーマスさんの紹介で、石巻のBさんとも連絡を取りあいました。Bさんの水産加工場は被災したままで、「泥かき」等の力仕事のボランティアを探しているとのこと。ダビデ・ファンガーさんの紹介で、大船渡のA医師とも連絡取れました。

ほかに、釜石のそばで、12メートルの防潮堤が津波で流されたすごい写真を新聞が1社だけ、報道していました。それは、神さまが許された、すさまじい威力を実感できるシーンと思え、早い段階で、一度、取材に行きたいと思いました。

「まったく飛び込み・アポなしで、物資の支援やボランティアを申し出た場合、どこまで道が開かれていくか」、それも試してみたいと思いました。白紙だったスケジュールは、仙台→大船渡→釜石→仙台→石巻→東京と大まかな計画が与えられました。ハレルヤ！

## 一路、陸前高田・大船渡へ

東京からの堀井卓さん、洋二さんと次男の伊左久君（20）、そして仙台の松岡さんらと合流。仙

菜も無しだったの。入れさせてもらいますね」。ハレルヤ！

津波の時、朱伝道師は、日本語での津波のアナウンスが聞き取れなかったそうです。地震後、教会で祈っている時に浸水が始まり、最初は講壇のクリスタル製の大きな十字架等を、倒れないように、抱いて押さえていたものの、水かさが増すにつれて、あきらめ、慌てて2階に逃げたそうです。

水道やガスの復旧はまだでしたが、寒い夜、通じたばかりの電気でも暖かくしてくれ、とても感謝でした。

## 浸水した教会の掃除から

1年半前に新築した教会の1階にも津波が押し寄せた(4月 大船渡市)



台を出発して、約3時間。山あいの国道を走っていたところ、突然、全滅に近い集落が現れました。陸前高田市。かなり山間部なのに、多くの家が根こそぎ流され、ことばを失います。こんな山辺にまで津波が押し寄せたのか、一気に暮らしや命が奪われ、どれだけ辛かったらうか？と、ショックを受けました。

数キロ走って、海辺に進むと、平野が開かれますが、一帯が壊滅状況。市街地で、道路は広くなるものの、あちこちで断線・隆起し、通行止め、迂回の連続です。崩れた国道の脇に造られた仮の道路には、まだ海水が流れ、車は徐行し、海水をかき分けて走ります。橋も流され、突貫工事で架けられた仮の橋へ。5階建てのホテル等以外は、が



津波が過ぎて(4月 陸前高田市)

れきすら残っていません。被災した町の状況はそれぞれ違い、そのひどさに胸が痛みます。

## 2階だけ、明かり灯った教会へ

夜7時、大船渡のA医師の病院に到着。A医師は、今回の津波で、同居していたお父さんを天に送りました。ドアに手をはさまれて、そのまま津波の水かさが増して…とのこと。案内されて、A医師宅の隣に建てられた教会へ。韓国からの女性伝道師の朱恵子さんと、一緒に牧会をしている女性のみどりさんが笑顔で迎えてくれました。1年半前に建てられたばかりでしたが、1階は全部浸水で、流されてきた泥や木材やタイヤの山でした。2階は、ぎりぎり大丈夫で、「昨日、ようやく電気を通してもらったところ」ということで暗がりの階段を手探りで登り、2階に行きました。

まず喜ばれたのが、持っていた肉とキノコと野菜。朱伝道師たちも避難所で暮らし、出会った方々に配給等もされておられ、「これ、皆さんに喜ばれる！ みどりさんが、今、作ってたカレーライスは、肉も野

2日目は、早朝祈禱会、津波に襲われた教会の掃除。十字架などは、全部、流されたそうです。しかし、津波の後で、町の人々とふれあう機会も広がり、避難所暮らしの中で、福音を分かち合うチャンスも拡がって感謝とのことでした。

## 浸水してない人々も痛んでいた ——解雇・失業、そして……

その後、朱伝道師のリードで、低所得者層の多い市営住宅をまわって、支援物資を配布。津波被害の無い丘陵エリアだったので、「うーん、どうかなー？」と思ったけど、話しを聞くと、「すごいうれしい。水産加工場に夫婦で勤めていたけど、津波で工場が流されて、2人とも、解雇。収入はまったくないし、失業保険の給付には、まだ日数かかるので、今、お金がないです。食事の時は、避難所で食べさせてもらっています。でも、ガソリン代もかかるし、毎回行けないので、このような

跳ね上がった線路。この先の鉄橋は橋げたと共に流されていた(5月 釜石市)



助けはとても助かります」と、喜んでくれました。避難所で出会った朱伝道師を通してクリスマスチャンになられた、中国からの姉妹のことばです。そのほか、フィリピンから来られた方とか、その方の近所の3家族とか、みな喜んでくれました。町全体が苦難の中にあることを実感しました。

## 崩壊した 高さ12メートルの防潮堤

大船渡の中心街の廃墟を見つ、釜石へ。途中、完全に落ちた鉄橋があり、トンネルに行くと、断線した線路のレールが、ぐにやりとまがり、3メー



12メートルの高さになった防潮堤（釜石市）▶  
横倒しになった防潮堤（4月）

今は静かな海。破壊された防潮堤（5月 釜石市）▼



トルあまりの高さにはねあがっていました。そして『一枚の報道写真』がとても印象的だった、破壊された巨大な防潮堤へ。約500メートルに渡って集落を守っていた高さ12メートルの防潮堤。幅が一つ20メートルを超える重い防潮堤が4つ、ごろんこ

ろんと、なぎ倒されていました。どれだけ、すごい破壊力であったことか...。今度、ティーンが来たら、必ず連れてきてあげたいなーと思いました。



▲Kおばさんは物資を風呂敷に包んで坂道を。「(稲葉)すごく可愛らしいので写真撮っていいですか」「(Kさん)あら(笑)。こんな格好しているものね、いいですよ」「(Lさん)Kさん、にっこり笑って写るんだよ」

「飛び込み」での物資支給。町内放送をかけて集まって下さった(4月 釜石市浜町)▶

てきてくれて、さらに町内放送で、「ただいま、ボランティアの皆さんが、支援物資を持ってきてくれました。通りの駐車場にお集まり下さい」と2度、3度とアナウンスを入れてくれました。すぐに50名ほど集まり、一気に、にぎやかになりました。持っていたマイクロバス1台分の支援物資は、15分ほどで、全部、わーっと無くなりました。僕たちの食事も、缶詰も、「(洋二さん)稲葉さん、これ、あげてもいいよね」「(稲葉)いいと思う」ということで、小さなダンボール箱分も並べました。いろんな種類があったので、これ、大人気。

「こは誰も来てくれてなかった。うれしい。避難所には車もないし行けないから、大変だったんだよ」「そんなに喜んでもらって、僕たちもうれしいです。もし喜んでもらえるようであれば、また来ますので」「(Jおばさん)それはうれしい。今度、良かったら下着を持ってきて」。町内アナウンスの手続きをしてくれたJおじさんは、「船を2艘持つだけで、流された。残ったのは、このバッテリーだけ

「こは誰も来てくれてなかった。うれしい。避難所には車もないし行けないから、大変だったんだよ」「そんなに喜んでもらって、僕たちもうれしいです。もし喜んでもらえるようであれば、また来ますので」「(Jおばさん)それはうれしい。今度、良かったら下着を持ってきて」。町内アナウンスの手続きをしてくれたJおじさんは、「船を2艘持つだけで、流された。残ったのは、このバッテリーだけ

## 飛び込みの物資サポートを、町内アナウンス、町内の皆さんの歓迎 初対面での心のきずな

それから釜石市内へ。ぼろぼろになった新日鉄釜石の製鉄所を抜けて、釜石港に向かいます。「(稲葉)このあたりは誰もいないね。人がおられるところに飛び込みで行ってみようかな」「(洋二さん)そうだね。向こうに見える、山側の町、どうだろう?」。トライしてみたかった、アポなしでの支援活動の始まりです。

マイクロバスがようやく通れるぐらいの坂道を登っていくと、軒先に、おばさんの姿が見えました。バスを止めてもらい、少し年配のEおばさんに、洋二さんと声をかけました。そのEおばさんは、見知らずの私たちを快く受け止めてくれて、「町内会長のFさんに連絡するから、ちょっと待って」。通りには別のGおばさんに「Fさん、どこに行ったらかな。支援物資、持ってきてくれたんだって。さっき、ここにいたんだけど」「(Gさん)家に行ってみるわ」。向かいのIおじさんが出てきて、「物資配給の町内放送かければいいんじゃないか」ということで、駐車場でお店を開くことになりました。10数人集まっ

なんだ」と、墨のすずりみたいな小さなバッテリーを2つ、見せてくれました。「一つ向こうの町は、津波は何も来なくて天国。でも、こっちは地獄だよ」。

最後、町内会長のFさんに連絡先等をいただいて、帰ることにしました。7、8人残って感謝して見送ってくれました。それで皆さんに握手してあいさつしました。さっきの船を2艘流されたIおじさんの番が来たので、威を正して、「船、2艘流されました」と頭を下げて手を差し伸べたら、みんな爆笑。Iおじさんも「(笑)」で、ぎゅっと握りしめてくれました。なんか少し心が通じ合えたみたいで、うれしかったです。

## 陸前高田から気仙沼へ 壊滅的な街並みと 大火の焼け野原へ

再び、壊滅状況に近い、陸前高田へ。昨日は走れた道路や臨時の橋は、今日は通行止め。

道を迂回しながら、気仙沼へ。津波のあと大火事になったところ、がれきと焼け野原の続く、本当に胸が痛むエリアを車で走り続けます。立ち込める重油の臭い。40メートルほどの大きなまぐろ漁船が焼土の住宅地に置かれたままでした。夜10時半ごろ、仙台のワインスタジオに到着。



津波の後、夜通し焼け続けた気仙沼市。まだ原油が燃えた臭いが残っていた(4月)

翌朝は7時出発。物資の補給後、石巻で被害にあった水産加工場のBさんの自宅へ。ここでもすごい感動の1日が待っていました。

## 2時間後に分かった理由

Bさんの家では、ヘドロ掃除、濡れた畳、家具等の廃棄の手伝いでした。Bさん(44)やお父さんのCさんらにあいさつし、まずは、庭に流れ着いた魚粉の袋運び。俵のような大きさで、水を吸って固まっています。4人がかりでようやく動く感じでした。

あれ？と思ったのは、最初、CさんとBさんが立っていて、作業しているのは僕たち4人だったことでした。表情もことばもあまりありません。「疲れているのかなー。遅刻しちゃったから、信用失ったか

理な状況です。畳1枚も、水とヘドロを吸い込んで、とても重いのです。伊左久君と2人では持ち上げられず、かなり腰を入れて体全体で押さえながら、狭い庭先を必死に転がして運びました。多分、16枚ぐらい。後で、ニュース番組で、「水に濡れた畳は、大人4〜5人でなければ運べません」と報道されていて、「そうかー。やったー。僕らはよくやったんだ！2人で動かしたのだから！」と誇らしげに思いました(笑)。とにかく、4人のボランティアとCさんB



住宅地に流された巻き網漁船(4月 気仙沼市)

な。本気で助けようとしているかどうか、見ているのかなー」。朝、物資補給に手間取り、また渋滞に巻き込まれたりして約束の時間より1時間遅れて到着し、昼抜きで作業に入りました。でも、その本当の理由は、後で分かりました。30分、1時間と僕たちは、とにかく全力で働きま

さん親子、総計6人は、ふらふらになるまで約5時間、必死に家財道具の処分とヘドロかきに明けくれました。

寡黙なCさんとBさんが、最後、それぞれ別な場所で「助かりましたー。本当、助かったー」と、心の底からあふれだした安堵の思いを語ってくれました。

## 天使だったのかな？

「(稲葉)ご近所で、物資、必要な方おられれば少しありますが…」(Bさん)うーん。どうかかなー」「(稲葉)もちろん、無理にはありませんので…」ご近所の関係とか、いろいろあるだろうから、物資配布とか、しない方がいいのかな…と思いました。

それとは別に、Bさんに話しました。「(稲葉)お昼に着いた時に、最初、家分が分からなくて、角の道に入っちゃって。そうしたら、40代ぐらいの若い夫妻が、僕らを見て、物資の支給ですか、私たちもほしいですが…と来られたんです。『これから、そのT水産で作業するので、どうぞ来て下さい』って言ったんだけど、来られなかったなー」「(Bさん)え？このあたりで若い夫妻っていないんだけど」「(稲葉)この角をまがった道路のアパートに入って



畳の下のヘドロかき(4月 石巻市)

元気が力が出てきたのだなーと思いました。

## 水に浸った畳の重さ

実際、後片付けは簡単ではありませんでした。頑固なCさん、Bさん親子でも、2人ではとても無

いかれました」「(Bさん)うーん。誰だろう？行ってみましょう」ということで捜しに行きました。Bさんは、近所に向かって大声で呼びかけ始めました。「誰かいませんか。これから物資の配給が始まります。角のT水産です」。まわりは半壊状態の家々なので、人の気配はほとんどありません。静けさの中で、Bさんはびくりするような大きな声で繰り返します。「誰かいませんか。物資の支給を始めます」。一階に上がった長男のN君(4)も、お父さんに負けない大きな声で「誰か、いませんかー。物資の支給始めます」。静まった住宅地に親子の声がこだましていく中で、1人のおばさんが、ドアから顔を出しました。「(Bさん)これから始まるよ。東京から、いろいろ持ってきて下さった

水につかった家財の処分。とても重い!(4月 石巻市)





Cさん宅で物資の支給。「お菓子もあるよ」とBさんの奥さんが手伝ってくれた

んだ」「(Oさん) わー。お水あるかなー。足りなくて困ったのー」。Bさん親子はさらに10分ぐらい、叫び続けました。僕は、ものすごく感動してしまいました。

T水産の庭に戻って、物資を並べた頃には、20人あまりの方が集まってきてくれました。「わー、ニラがあるの？ にんじんも？」「お茶があれば…」「鍋とかお皿とか、台所セットだつて。これ、助かる」「私の知り合い、赤ちゃんいるから、子どもの服助

Bさん、Cさん家族との写真撮影。その時、Bさんは、チア・マガジンを胸の前に掲げ、それを抱きしめるようにして写真に写りました。とにかく、感謝を表したいって気持ちだったんだろうなーと思います。ご家族の皆さんの表情もとても明るくなつて良かったです。

### 第3回チア・東北サポート、 恵みの中に敢行！

第3回(5月10〜13日)は、いよいよ、ティーンに門戸を開きました。今回は初めて23名という規模、ティーンたち、LIT(リーダーズ イン トレーニング) チームや、建築会社社長さん、ホームスクーリングママさんら女性陣も加わりました(シニア代表も1名含む)。特にティーンたちには、いろいろな意味で心を準備し、このすごい機会を通して、これからの人生に最大限、生かしてほしく、事前のセミナーの機会も設けました。僕は、今まで被災地で体験してきた思いを伝えました。

「町全体で、お葬式を行っている、悲しみに満ち満ちた、とてもセンチティブなところに伺う。もちろん、みんなワンワン泣いてるわけではない。穏やかに、気丈に、静かなほほえみがあるよ。でも、その表情の下には悲しみ、ショック、不安があり、感情的にも霊的にも、とても深い痛みと圧迫の中に

かる」「ほら、あんたたち、カロリーメイトあるよ」「(高校生) やったー。もらっていきます。ありがとうございます」「毛布もあるの？ ありがとうございます」…と、またまた15分ぐらいでほとんど無くなりました。また洋二さんから、「稲葉さん、これ、僕らの帰り用の食事だけど、いよいよね」ときたので、「稲葉) いいと思うよ!」となり、今晩の夕食用のパンや、缶詰、栄養ドリンク等、広げて、これも好評のうちに無くなりました。でも、心には、すごい喜びが残りました。

お昼に会った若い夫婦は結局、現れませんでした。もしかして天使だったのかな。彼らがきっかけでBさんが物資配給を決定してくれたので…。

### 抱きしめられたチア・マガジン

皆さんが帰られて、残ったBさんが、「稲葉さん、皆さんは、どういう団体ですか。なんとお礼の気持ちを表したらいいものか…」と聞いてくれました。クリスマスチャンの団体で、明泉のトーマスさんの紹介つてことは、十分、知っていました。いい意味で、さらに聞きたいという感じでした。それで、「学校任せにしないで、親が責任をもって子育てしよう、それを祖父母やまわりで助けていこうつて、聖書に基づく教育を応援してる団体です。東北にも明泉始め、メンバー多いので、全国のクリス

ある。そんなところに、何か助けになることをさせていたきたい、寄り添いたいとの思いで行くんだけど、実際は寄り添えない。ただ、少しか、共にいさせて下さい…というか。謙虚でやさしい、思いやりと敬意をもった姿勢が必要だよ」。それから2時間あまりのミーティング。みんな真剣で、とても感謝でした。

### ティーン初の本格参加 ——キリストの弟子のこころ

出発の日の朝、トラックへの物資の積み込み。今回は、釜石の皆さんからリクエストいただいた下着スコップ、一輪車、長靴、果物、野菜、お菓子なども加えた約2トン。

折つて、出発。途中、いわき市を過ぎ、東北自動車道から見える街並みや校庭からは、人の姿が見えなくなります。原発事故は、地域の様相を一変させています。

### 突然、現れた被災地にて

#### ——陸前高田

仙台では、国際飢饉にて野菜等を補充し、宿泊地、大船渡へ。

陸前高田市。山あいの国道ぞいに、突然、津波

チャンの皆さんから、義捐金が寄せられて、その内、明泉の皆さんからも、東京で物資を買ってきてーと言われて。聖書が言うように、泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜べれば…つて、そんな気持ちだったのです。だから、Bさん、いい機会を、こんな微力な僕らに与えてくれて、とても感謝しています。詳しい経緯は、このチア・マガジン34号に書いてあります。良かったら、差し上げますが…」「(Bさん) ぜひ、読ませて下さい。それと、稲葉さん、記念に、みんなで写真、撮りましょう!」。



家財の処分・泥かきを終えて。BさんCさん家族と共に(4月 石巻市)

に打ち破られた家々、横転した車が現れ、楽しかったバスの中の雰囲気が一転、張り詰めた空気に変わりました。

2週間ぶりの陸前高田は、少しがれきの処理が進んだようでしたが、壊滅状態の町の様子は、そのままです。よく復興のシンボルとしてニュースで取り上げられる一本だけ残った松の見える港に、バスを停車。15メートル以上の高さに集められたがれきの山や、壊滅した街の様子を、チームのみんなに、



陸前高田市・がれきの前でいのちと暮らしを思うパート2

直接、見てもらおうと思いましたが。ホテルの4階、場所によっては5階まで、津波のあとが残っています。ものすごい量の津波が襲ってきた状況がよく分かるエリアです。

今夜の宿泊地となる大船渡市へ。ここでも、被災した港やショッピングセンターのビルなどを、みんなに歩いてもらいました。ここで、仙台から軽トラで追いかけてきた松岡さんと合流し、泊めて下さる大船渡の教会へと向かいました。3週間ぶりとなる朱伝道師が、笑顔で迎えてくれました。

## 今日、見る状況を忘れないで ——ヨルダン川を渡って 置かれた記念石

翌朝6時。礼拝にて、朱伝道師がヨシテア4・1〜14からメッセージ。エジプトの地を出たイスラエルの民は、40年かけてヨルダン川へ。渡るのも困難な激流の前に、神に従い、信仰をもつて川に足を踏み入れると、奇蹟が起こり、流れが止まった。最後の人々が渡り終わると、人々は石を12個置いた、神の御業を忘れないために。「クリスチャンの若者と、こんなに出会えるのはうれしい。これからの日本を引つ張っていくと思うので、今日、目にする状況を忘れないように」とのメッセージ。

朝6時半。教会の隣のA医師宅のへドロかきか



あいさつの機会与えられて  
(5月 釜石市)

できませんが、わずかでも、皆さんと心を共有できればと思っています。今日、どうぞ、よろしくお願います。皆さんに、神さまの祝福があることを心から祈っています。

皆さん、あたたかいまなざしで、一言、一言を集中して聞いて下さり、とても感謝でした。メロン



土のう袋運び、約50袋(大船渡市)

らスタート。おじいさんがドアに腕をはさまれ、津波が押し寄せ、命を失った家です。流れ込んだ材木、魚ごみ、へドロのまざるた表土をスコップでかき、土のう袋に入れます。重さ30〜50キロほどになった土のう袋は、すぐに60袋あまりが満杯。2トン以上の山となりました。この現状が、被災地のそれぞれの家の状況です。復旧、復興の仕事量は膨大です。

とか、チアメンバーのママさんたちが、4分の1にカットしてくれて、多くの皆さんに渡りました。ティーンのみんも、がんばりました。30分もしない内に、2トンの物資が無くなり感謝でした。

メンバーの手記です。「Aさん(16)・・・東北の方へ向かってからは、自分の自我との戦いが続きました。すぐに他の人を裁いてしまう自分。泥だらけになりたくない。しゃがむの辛い。疲れた…。自分の事ばかり考えていました。そんな時に救援物資を配りに行きました。取り合いもせず、近所の方々と愛し合っておられる被災者の方々を見て、何かあつものがこみあげてきました。私がいなければならぬこと、(それも今!!)それが分かった気がしました」

## トラック2台分の皿洗い 約5時間

その後、Fさんがアレンジしてくれたボランティア活動へ。頼まれた仕事は、浸水し、へドロにまみれた食器や皿洗い。「B君(20)・・・瓦礫の撤去作業だろうと思ひ、防塵マスクと簡易防護メガネを準備し『いざ!』と気合を入れながら行ったところ、言い渡された仕事は、『皿洗い』。しかしこの皿洗い、侮るなかれ。総勢24人でやっても5時間かかるほどの膨大な量で、終わるころには腰が痛くて辛かった。

それでも、24人で、みな真剣なので、スピードが早い! 早朝からの力仕事で、お世話になった教会の隣家を手伝え、気分は晴れやかでした。その後、キムチご飯をいただいて、釜石へと出発しました。

## 助ける喜びと通じ合う心 ——釜石・浜町での物資支援

釜石市では浜町に向かいました。前回、飛び込みで物資の支給を行った場所です。町内会長のFさんとは、何度か電話で打ち合わせをしました。前回同様、全町内にアナウンスして下さい、60名あまりの皆さんが集まってくれました。2回目なので、少し顔なじみの皆さんも増えてきました。F町内会長さんは集まった皆さんに、「皆さん、先月に続いて、励ましに来てくれました。とても感謝なことです。この後は、ボランティアの労働をされる予定になっていて、すでに長靴履いて、本腰で準備下さっています。ありがたいです。せつかくですので、稲葉さんにごあいさつを」と、機会を与えてくれました。こうして、直接、被災者の皆さんと話す機会を与えて下さることは本当に感謝なことと思いました。

「こんなに温かく迎えて下さり、心から感謝しています。私たちはクリスチャンです。全国のクリスチャンたちから、何か少しでも皆さんの応援になれ



思いを込めて洗う(5月 釜石市)

が、やり終えた時の達成感はとても気持ちが良いから」。

5グループに分かれて、5段階ぐらい洗い直すので、皿や食器は、ぴかぴかになりました。こうした食器の背後に、どれだけの暮らしが変わったのかなーと思いました。

釜石社会福祉協議会の方は、「チアの皆さんは本当に一生懸命された。それだけじゃなく、すごく楽しそうにやっていたのが、よく分かった」。みんな、喜びの中で一生懸命やってくれました。見ている人々にも伝わっていて、うれしかったです。

## へドロかき作業

翌朝、石巻の水産加工場主、Bさん宅に向かいました。今回、電話すると、工場や床下のへドロかきをお願いできるなら、ぜひとのことでした。まずは最初は、工場の前で物資の支給。40〜50人の方が集まり、すぐに物資は無くなりました。

3つのグループに分かれて、へドロかきの作業スタート。井戸のような円形コンクリートのタンクには真つ黒な原油、魚がれき等が液状化したへドロがたまっていました。最初、皆でスコップでかき出しましたが、深くなるとスコップの柄がぶつかり、うまくくえなくなりました。それで、まず私が五右衛門風呂のように入って、バケツですくってみました。そうすると、よくすくえたので、ほかの2つのタンクを担当したティーンたちにも、「これ、深さ胸ぐらいで大丈夫だから、中に入るとやりやすいよ!」と呼びかけました。

「Cさん(16)・・・一番葛藤したのはBさんのお宅で、漆黒のへドロの中に!!入って作業することになった時です。いやだなあ〜と思いつつながら汗々中に入り、シヤベルで少しずつかき出し始めました。初めは汚れたくないから直立してちよとずつシヤベルでやっていた。しかしそれでは一生終わりそうになかったのでプライドを捨て、へドロに浸かってバケツでや



へドロ目に入った、看護師さんよろしく!

が流れたし、「トンネル開通」の状況になりました。よくあの重さが動いたナー、神さまが力を与えてくれたんだナーと、今でも思います。女性陣も3人、ホコリと泥まみれで、重労働を黙々とがんばっていました。

## バツバ

庭の井戸チームを取材に行くと、へドロがいつぱいの池の掃除班が励んでいました。水と泥をかき出すと死んだ魚がたくさん出てきたらしいです。社

ることにしました。それでもやりにくかったのが最後は手で作業しました。最初は本当にいやでしたが、途中から一緒に作業していた2人と冗談まで言い合ったりして、笑いながら終われました」「Dさん(16)・・・最初は、臭くて足もへドロにはまるし嫌だったのですが、友達2人とやっていたのでだんだん楽しくなって、なんかこの五右衛門ぶる落ち着くねと言っていました。おじいさんが適当でいいよと言っていたのですが、私たちは最後までやりたかったの



床下の泥かき

長のCさんと一緒に作業していたGさん(14)。明るいキャラクターを生かして、わいわい話しながら、泥かきを率先して行っていました。Cさんは「私もバツバと



庭のへドロかき

か、宗教音楽、好きなんだよ」「(Gさん)そうなんですかー」。そんな会話が生まれていました。「Gさん・・・掃除をしていると、自分はまだ役にたつてないような気がした。でも、おじいちゃんと一緒に掃除をしている時、『ありがと』と言われて『あつ、自分も少し役にたつたのかなあ』と嬉しかった」。

## Bさんの驚き

「家」チームは、廃材運びと床下と池のへドロかき。これも、腰を使うので重労働です。トイレやお風呂の方に行くと、まだまだへドロも液状化状況。でもこうして、家の隅々まで作業させていただく関係が与えられるなんて、すごいことだなと改めて思いました。

で、底が見えるまで頑張ったら、おじいさんが、おっ、こんなに綺麗にしてくれたかい、と喜んでくれました。その後は、泥だらけの洋服と食器を洗いました。寒かったけどご家族が喜んでくれたのでよかったです」

## 水産加工場にて 鉄板との格闘

へドロ井戸を任せて、水産加工場に向かいました。家と少し離れ、そこに行ったチーム8人は、孤立した場所に志願した宣教師みたいな存在です。8人は、へドロかきと工場の機器の移動を必死に行っていました。シヤベルでへドロをすくっていると、ティーンの男子2人が「稲葉さん、これ動かないけど」。排水路に架けられた鉄板が動きません。私もやってみましたが重くてびくともしません。スコップの柄を「てこ」にして3人で全体重をかけますが動きません。その重さは、腰にもきて、今でも覚えているくらいです。「これ、人の力で無理だ。やめよう」。私はそう言いました。でもその後も2人がトライを続けるので、私も再度、加わりました。何度かチャレンジしてしばらくして、鉄板が動き、はずすことができました。「やったー!」。すごい感動してしまいました。E君、F君が、鉄板の下にたまたまいたへドロを出すと、ごぼごぼとたまっていたもの

私が2時間ほど廃材運びをしていたところ、Bさんが「お父さん(社長)、工場の方、どうなった?」「(お父さん)すごい片付いた。さっき機械も移動できたよ」「(Bさん)うそだろー。見に行くよ」。それで3人で工場に行きました。

工場に入ったBさん「うわー、信じられん。よく、ここまでやったなー。すごい。これは助かったー」。Bさんの真剣に驚いた声は、忘れられません。

洗濯、食器洗いチームは女性陣が中心、最後は小雨の中での作業となりました。Bさんいわく「ど



う、ことばで感謝したらいいか、分かりません。本当に分かりません。クリスチャンの人たちの助けについてうか……。Bさんとの会話が小雨の中で、どんなはずんで止まりません。それだけ、みんなが喜びに満ちていました。こうした親しい交わりが用いられ、その次の第4回東北サポーターにて、牡鹿半島の漁師さんたちとの港のがれき掃除へとつながっていきます。

## 若林区に行ったら？

最終日、ワインスタジオの服部豊君が話しかけてくれました。「稲葉さん、空港のそば、ひどいよ。昨日、行ったら、震災直後の様子とほとんど変わらなかった」。先に仕事で仙台に戻っていた松岡さんに聞くと「名取や青葉区、若林区ですね。あそこはひどい状況ですよ」とアクセスの方法を教えてくださいました。神さまの導きも感じ、予定変更、若林区に寄ってから東京に帰ることにしました。仙台のすぐそばなのに、なぜ、復旧が遅れているんだらう？「かなり被害が甚大で、復興をあきらめた地域が多い」という情報も入ってきました。どういう状況なのだろう？震災の翌朝のニュースで、「仙台市若林区で200人以上の死者が出ている模様」との情報が全国に流れました。今回の震災の深刻さが広まる第一報となった、その場所です。

れうれしい！避難所の普通のお米、私には固くて……。この2ヶ月、ほとんど食べられなかったの……と心から喜ばれていました。

## 特権

5月の東北サポーターを終え、ロサンゼルスに戻ると、石巻のT水産のBさんから、電話が来ました。「今、侍浜つとところに来てますが、ボランティアの必要あるらしいです。マスコミなど、誰一人来てない場所ですが、いいですか」「もちろんです。誰も行ってない、必要がある所に行きたいというのが、チアの願いですから。今回、25人ぐらいで行きますね」

「そうですか。侍浜の港は壊れてしまって、網やら、がれきやらで大変らしい。手伝ってもらえるなら、とてもうれしいとのことだけど、いいですか」「もちろんです。侍浜の皆さんに、今、何があらうらうれしいか、必要を聞いてもらえますか」

「分かりました。いったん、電話切りますね」約15分後、再び、Bさんからロサンゼルスに電話。「網を切る鎌みたいなものですね。あとは長靴。そして、許されれば、肉、野菜とかあれば、ということでした」

「(稲葉) 分かりました。準備します」

地区のゲートでは、警察の検問がありました。通行止めが相次いでいる道路で、がれき処理の工事車両しか通さないとのこと。少し粘り、「支援物資の支給車」であることを伝え、祈って、返事を待っていると、道が開かれました。

「Hさん(16)……最後に若林と名取に行った時には言葉を見ました。他は、家の土台が残っているところが多かったのに、そこには何もありませんでした。こんな所に人がおられるんだらうか、と思いましたが。おられました。少しでももどかに戻そうと悲しみを乗り越えて一生懸命働いておられる方たちが。その方たちの満面の笑顔を見た時に、私は絶対にここに帰ってくと決意しました」

被災し半壊となった家で、後片付けをしている高齢の方の姿が見えました。それで、あいさつとりサーチに行ってみることにしました。「(稲葉) こんにちは。いろいろと支援物資を持ってまわってきましたが、何か役に立つものありますか。するとMさんは、「あー。それは助かる」では、トラック、開けますので……。物資を紹介していると、近所の皆さんが数人、集まってこられました。状況を少し伺い、自己紹介した後で、「今、若いみんな23名あまりで、ボランティアでまわってききました。次回、また来られればと思ってますが」「いっぱい、お願いしたいことあるよ。ぜひ」そうですか。若いメンバーたちを皆さんにあいさつさせたいですが、いいでしょ

## 第4回チア・東北サポーター ——マンシヨンの人々や 果物屋さんのエールを受けて

6月20～24日の第4回チア・東北サポーターは25名で行ってききましたが、さらに深い体験が待っていました。

初日の朝。東京、チア・にっぽんオフィス前に「キリストを信じる者はみな、永遠のいのちを持つ 聖書(ヨハネ3:15)」ほか、聖句が大きく書かれた4トントラックが登場。積み込みから始まります。私たちのことをよく知るマンシヨンの管理人さんの解説を聞いていた婦人が近づいてきて、私に「被災地に行かれるんですね。これ、私の気持ちです」と1万円札を渡してくれました。「(稲葉) ありがとうございます。お名前か、部屋の番号を」「いいえ、いいです。自分は何もできなくて思ってたので……ありがとございます」と言って、小走りに去っていかれました。向かいの野菜&果物屋さんの渡辺さんが、メロンやすいか、さくらんぼ、りんご、ほうれん草、ねぎ、かぼちゃ……そのほか、市場で買ってくることをお願いしていた9万円分の野菜と果物を持つてきてくれました。「これ、私たちからの気持ちです」と野菜や果物、さらにおまけで5、6箱も持つてきてくれて、とても感謝しました。

うか」「どうぞ、どうぞ」

バスに戻ると、みんなが、自分たちの昼食分とかをカンパして集めてくれました。「被災者の皆さん、OKだつて。さあ、あいさつに行くよ！」

「Iさん(16)……何かできないかと思ってみんなで行った食料を袋に入れて渡しました。私たちがバスから出るとその地区の住民の人々が、若いのがこんなにかいと驚いていました」

ある方が、おかゆを渡すと、高齢の方が、「こ

大船渡にて(4月)



聖句が書かれた4トントラックで出発(6月)

## 釜石…地域の人々の顔が 分かるようになった

仙台を経由して北上し、一路、岩手県住田町へ。1晩だけ、サマリタンスの宿泊ベースにお世話になりました。2日目の支援地、釜石・浜町で支援物資の支給、4トントラック。もう3回目なので、心の交わりが深くなってきました。

10時開場ということで、9時ごろ着いて、物資

の準備。4トン分なので、かなりの量です。特に、夏服1トン半（明泉幼稚園から）や、カットの必要なメロン、すいか、かぼちゃらは、超忙しい状況。顔なじみになった町内のご婦人たちが、すでに9時過ぎから並んで待つてくれています。いつもどおり、町内放送をかけてくれて、約80名あまりの皆さんが集まって下さいました。

10時。まず、町内会長のFさんが歓迎のあいさつをしてくれました。その時、最初から並んでいたB婦人がちよと怒った感じで叫ばれました。

「ぜひ、家流された人、優先させて下さい。この前も、家流された方が、後ろになつて、必要な物もらえないことがあったし。私、泣きたくなる。お願いします」

Fさんは、「そうですね。皆さん、そのようにし



すいかや新鮮野菜が喜ばれた  
(6月 釜石市)

ましよう！」と答えられました。水産加工場がぶれたり、街全体が不況で、経済的な被害も加えると、全員が被災者で、痛みの中にあります。その一方、直接、津波で家族や家、船、車等を失つて仮住まいをしている人々と、波がぎりぎり来なかつた人々では、格差もあり、微妙に複雑です。Fさんは、前回に続き「それでは稲葉さんに一言、お願いします」と紹介してくれました。

「稲葉）皆さん、今日で三度、お目にかかれてとてもうれしいです。今回も、温かく迎えて下さって、ありがとうございます。皆さんが大変な中にいるのに、僕たちは、何もできなくて恐縮しています。全国のクリスチャンたちが、少しでも寄り添わせていただきたいという思いから送ってくれた支援を届けつつ、若者たちも含めて、お手伝いできればと思つて来ています。今日も、よろしくお願ひします」。約80名の皆さん、あたたかく聞いて下さいました。これまで以上に、お互いを気遣いあつて、4トンの物資を喜んで持つていって下さいました。何度も、お礼を言つて。

### 気持ちを正直にぶつけてくれた夫人

後でF会長は2人になった時に話してくれました。「さっきのBさん、気持ちを正直にぶ

…」。Eさんのご主人のDさんは、3月11日に店で溺れて亡くなったとのことでした。「Eさん）津波来るみたいだよつて言ったら、「こは大丈夫だ。ま、シャッター閉めてから行くから、先にながつて避難してろ」つて。でも、すぐに津波が来て…」（稲葉）え、ご主人は「ごで」。「Eさん）そう。ここで、だめだったの。私はその階段から登つて上にながつて…」（稲葉）そうでしたか…。ショックですね…」（Eさん）これも運命だろうと思つて、あきらめてる…」（稲葉）まぎりのナイフ、ありがとうございます。

買えて良かったです。牡鹿半島の侍浜の漁師さんたちからのリクエストで、とつても喜ぶと思つて。Eさん、僕ら浜町の3丁目で物資の支給で、Fさんにアレンジしてもらつて、毎月1回来てました。何か、必要ありますか。野菜とか、果物とか、夏服とか、長靴とか、スコップとか持つてきましたか…」（Eさん）野菜とか果物とかいいね。私、買いますから「稲葉）いいえ。これは私たちからのお見舞いです。プレゼントさせて下さい。ほかになべとかもありですが」（Eさん）なべはいいです。うちは金物屋でなべは売るほど、たくさんあるので（笑）「稲葉）そうでしたね（～）。では、野菜とか持つてきますので少し、お待ち下さい」。

それで、待機してくれていたトラックの勇二さんや松岡さんが手伝つてくれて、メロンやすいか、白菜、ねぎ、にんじん、かぼちゃほかをダンボールに詰めて

持つていきました。「Eさん）わ、メロン。わ、白菜もほしかった。これはすごい。買わせて下さい。（と）いつて3千円ぐらい出して（～）ぜひ！」（稲葉）いいえ。それは大丈夫です。お金は受け取れないです。これは全国のクリスチャンたちから送られてきた義捐金で購入したりしています。だから、クリスチャンからの、せめてもの気持ちだと思つて、そのまま受け取つて下されば、とてもうれしいです」（Eさん）分かりました。そのお気持ち、本当にありがとうございます。箱つめしてくれた「まぎりナイフ」9丁もばつちり。Eさんも、少し笑顔で送り出してくれました。神さまを讃えました。F会長さんは、「ありがとうございます。その一言に尽きます。ぜひ、良かったら、また来て下さい」とのことでした。

### 仮設住宅

午後は、新しい仮設住宅への備品の配布。暑かったです。25人が釜石市の人々と心合わせ、汗だくで取り組み、担当の方は、「今日は夜までかかるだろうと思つた作業が、午後2時30分前に終わりました」。

それで、帰り道に、気仙沼や、以前は通行止めになっていた気仙沼→南三陸の国道沿いの惨状を取材・社会見学させつ帰ることができました。その

つけてくれてうれしかった…。今は、それが大事なんだよね。Bさん家族は、今回の被災は甚大だった。ほかの人を気遣つて、代表してぶつけてくれた面もある。とにかく、すごく気を張つて、疲れも出ている時だから、みんなの前で気持ちをぶつけてくれたことをうれしく思っているんだ」

### ご主人が流された漁具店夫人から、まぎり（漁網用のナイフ）を買えた！

後片付けをチームに任せて、Fさんに連れられて、釜石で1軒だけ残つた漁具の店を訪ねました。翌日何う予定の牡鹿半島の侍浜の漁師さんたちから、「網を切るナイフを買つてきてほしい」と言われていたからです。

D漁具店は浜町の港のすぐそばで、多くの人々が亡くなった場所です。まわりは、がれきの山と全壊、半壊家屋が続く商店街。D漁具店は、1階は被害を受けているものの、2階部分は大丈夫で、従業員の方が、「まぎりナイフ（漁網用のナイフ）はあるよ」と2階から持つてきてくれました。津波をかぶつたせいか、赤さびは付いていましたが、でも、すごく切れそうでした。

女主人のEさんは、憔悴した表情で店の後片付けをしていました。「Fさん）Dさん、残念だった



「暑い」。仮設住宅の備品運び(6月 釜石市)

あたりは、市の中心部と違って、まだまだ復旧・復興が手つかずの状況で、心が痛みました。

### 牡鹿半島へ

#### ——キリシタン・支倉常長、出帆の町

3日目は、石巻のBさんCさん親子の案内で、牡鹿半島の侍浜の港を訪ねました。途中、Cさんはマイクロバスに乗つて道案内。僕たちがクリスチャンと思つて、キリシタンの歴史を丁寧に解説してくれ、うれしかったです。「こはね、支倉常長がサンファン

南三陸町防災庁舎にて——津波を伝える町内放送中、職員30名あまりが犠牲となった



## 11世帯の漁師の浜辺

侍浜は、11世帯の漁師さんたちの小さな入り江の集落です。最初に、物資の補給を行いました。いつもの物資も好評ですが、とりわけ1.5トンあまりの夏服がヒット。浜の奥さんたちに大好評で、何度も家と浜辺を行き来して、2〜3時間ぐらいいて、合う服を探していけます。「久々にシヨピングしてみるみたい」。その内、服をたたんだり、サイズ分けを手伝ってくれたりします。浜のがれき処理をしているお父さんたちは、奥さんたちが幸せそうにしているのを見て、また、うれしそうな顔になります。

何人かの女性たちを物資補給に残し、チームは並行して壊れた港のがれき処理をしました。震災後3ヶ月、手つかずだった港です。今回でチャサポートが4回目となった堀井卓さんいわく、「4月上旬の石巻のBさんと同じだ。最初、浜の漁師さんたち、ほとんど仕事が進まず、動きがスローだった。でも、チャのみんながてきばき動いたら、だんだん元気になって力が出てきたって感じだった」。

パウテイスタ号でスペインやローマに向かった月浦ですよ。「稲葉」彼が帰ってくる前にキリシタン禁令になつたのですよね」「Cさん」そう、彼は失意の中、帰国して2年後に亡くなつたのです」「稲葉、バスの中のメンバーへ」みんな、Cさんが支倉常長について解説してくれたよ。ここは…」

侍浜での物資サポート(6月 牡鹿半島)



40人あまりで片付けた水揚げ場や漁具置き場も、かなり片付き、整然としてきていました。漁師さんたちは「今日1日で半月分の仕事が出来た」「んだなー。すげーな」と喜んでくれました。最後は、漁師さんたちが1列になつてみんなと握手。人に仕え、役に立つことは、うれしいことだと改めて思い

ました。聖書が言うとおりで

「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者となりなさい。…人の子が来たのは、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための購いの代価として、自分の命を与えるためであるのと同じです」(マタイ 20:24、28)

## 漬け物食べて行きなさい ——仙台市若林区

4日目は、仙台市若林区のR材木工場へ。第3回の時に出会ったR社長のアレンジで、地域の皆さんが集まってくれていました。夏服は、ここでも人気。お母さん方がシヨピン気分度で長くおられたり、3度、4度と取りに戻ってきたり、チームのメンバーとの会話の機会がずいぶん与えられました。

桑谷美穂スタッフは、「家に来て、漬け物食べて行きなさい」と奥さん方に誘われて、いい交わりの



ホタテ貝の水槽でのヘドロかき

津波で柱ごとつぶされ、屋根が地面に残つた水揚げセンター、その瓦運びを一緒にしていた若い漁師のTさん(27)は言いました。「うれしいな。子どもと話したのは3ヶ月ぶりだ。顔見てるだけで、うれしくて、励まされるね。よく来てくれた。よく働いてくれるし、こうして話ができて、とてもうれしい」。Tさんは、2千万円の船を流され、漁師の継続を断念、仙台に行つてサラリーマンになることを決めたとの失意の中でした。「Tさん」今日はいよいよ。海は大きくて、きれいだよ」とは、漁師のUさん。

侍浜は、かきやほたての養殖が中心で、漁場は壊滅状況。「2〜3年は収入ゼロだと思う…」とのことでした。釜石の漁具店から入手したまきりナイフを渡すと、「これ、これ」「これ、最高だ」「漁具は全部、流されたから。これ必要だった!」と皆、喜んでくれました。崩壊した漁具置き場の壁はがしや、絡まった漁網を切つての後片付け。

半日が過ぎ、石巻のBさんが、「そろそろ、片付けて」。港の地盤が1メートル近く下がり、満潮時には、岸壁が水没するのだそうです。それを聞き、大急ぎで衣類等をトラックに積みました。

その頃には、私たち20数人と漁師さん10数人、

時を持ったようです。実際に出てきたのは、おだん。「(桑谷)これ、もったいないです」「(Hさん)いいのよ。これが私たちの楽しみなんだから。今、こういうのしか、楽しめないの。食べて」「(桑谷)いただきます」「(Iさん)どうしてこうして来てくれたの」「(桑谷)私たち、クリスチャンの団体で…」

支援物資場に来て下さったIさん「こうした支援グループが来たのは初めてだったので、とってもうれしい」。皆さんに呼びかけて下さったRさんは「今

▼「メロンなんて久しぶり!」(6月 若林区にて)



▼被災者との交わり深まる



は、まだ大型のがれき処理中で、ガスボンベとかあるから、ボランティアは入れない段階だけど、次は、ぜひアレンジするので、また来てもらえたら感謝です。でも、偉いと思う。これ、自分たちが逆の立場だったら、できねーな」と話されました。

## チア・カリフォルニアコンベンションにて報告

7月14日、日本から戻って2日後、チア・カリフォルニアコンベンション(参加者約5千名)の基調講演の時間に15分、「チア・につぼん」の報告をさせてい

で、断りましょうか」とメールが来ました。これは、今まで、ずいぶんお世話になつているアメリカのホームスクーラーたちを、今度は、日本側から、わずかも弟子訓練するチャンスでもあります。それで、人数限定で受け入れることにしました。

チア東北サポートの様子を伝える2本の記事がチア・カリフォルニアと、HSLDAの公式ホームページと会報に掲載され、全米に発信されました。第5回東北サポートへの3名の参加者募集と共に、募集については、願書のほかに、小論文や推薦書を必須として、選考試験を経ての参加とハードルを厳しくしました。

応募締め切りまで約1週間と、海外奉仕の募集としては超短期間で、今回、応募は難しいだろうから、祈りの課題となればいいですね...と、相談に乗ってくれているチアのブレインのジュリー・ホーンさんと話していました。でも、すぐに10人近くの間い合わせが来て、審査を経て5人を迎えることにしました。

震災当初は思ってもみなかった国際的な展開にも拡がり、不思議だなと思っています。

詳細は次号に譲ろうと思いますが、初めてUSAチームも加わつての26名での「第5回チア・東北サポート」(8月29日~9月2日)の遠征、その後、神さまに助けられてすぐ恵まれた時を過ごして帰りました。そこで頼まれた「泥かき」仕事

ただくことになりました。幸いなことに、この5、6年ほど、毎年、招いて祈つて下さっています。今年は、震災ボランティアについて話してほしいとリクエストをいただきました。

本番では、会場とのコミュニケーションが良く、心を通いあえて、うれしかったです。終了後、以下のように話しかけられました。

「チア設立当初から、ずっと祈つてるよ。毎年の報告に励まされてきたけど、今回は、それらが積み重ねられたハイライトだと思う。圧巻だったよ!」今もニーズが深いことに気づきました。ありがとう。ぜひ、ミッションチームに加わりたいんだ

が大量のため、第6回(10月17日~21日)は、48名の部隊の編成へとつながっていききました。

## 体験を語り始める被災者の皆さん、福音に心開いて下さって

回を重ねるに従い、被災者の皆さんが、その体験や、思いを、たくさん分かち合つて下さる機会が

けど、「支援活動のお金はどうしてるの? え、日本のホームスクーラーたちが献金してるの? それはすごい! 私からもチア・カリフォルニアに送っておくね!」

## アメリカのホームスクーラー、第5回東北サポートに参加へ!

その後の反響として、参加問い合わせがチア・カリフォルニアにも寄せられ、スーザン・ピーティ会長から、「いいセッション、ありがとう。すぐに参加したいと問い合わせが来たよ。無理しなくていいの

各地で与えられました。釜石で物資の配給後、あるおじいちゃんは、座り込み、津波に飲み込まれ、腰や足の骨を折りながら助かった状況を話してくれました。仙台市若林区で泥かきをした家のご主人は、「地獄絵だった!」と、被災した夜を振り返られました。暗闇の中から助けを求める声が続き、たくさんの方々が浮く中、船をこいで20人あまりを助けたとのことでした。このあたりでは、自衛隊帰還後の最近でも、遺体が見つかっていました。

それから、アメリカチームを中心し、聖書や、手作りの聖書のことば集とか、パンフレットを手渡しして喜ばれる機会ともなってきました。少し落ち着いてきた仙台では、ボランティアの最終日、数時間ですが、福音のパンフレットの宅配も始めました。第5回に参加した、娘のエミリー(14)は、「生まれてきて、一番、楽しい、すごい夏だった!」と言ってくれました。詳細は次号で皆さんに伝えたいと思っています。とにかく、いろいろと祝福されました。

神さまが、泣いている人々と共に泣くこと、仲間たちと共に仕える喜びを教え、また、神さまの福音を分かち合う機会を与えて下さった8ヶ月。被災者の皆さんやチームの仲間たちと、深いきずなを与えられ、



自分で書いた聖句入り詩画を渡すチームUSA(9月 若林区)



漁師さんと握手(6月 侍浜)



▼▲浜の復旧めざして(6月 牡鹿半島・侍浜)



心から感謝しています。心から感謝すると共に、被災者の皆さんにとつて、神さまの慰めと恵みと新しい希望あふれる日々でありますよう、心から祈りたく思っています。

そして、イエスさまが人に仕え、多くの人々の代価として自分の命を与えられたように、人に仕え、救しと希望の福音を伝えられたらと祈っています。

「人の子(キリスト)が来たの(は)、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである」(マタイ 20・28)



## 東北・関東大震災義捐金 受付口座

### 郵便振替

00190-3-35461 チア・にっぽん事務局

### 銀行

三菱UFJ銀行赤羽駅前支店

普通 1446697

ホームスクーリング・ビジョン(株)

チア東北ボランティアの  
詳しい情報、感想文等は  
[www.cheajapan.com](http://www.cheajapan.com) へ、  
どうぞ!